
ユウダチバイシクル

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウダチバイシクル

【Nコード】

N33400

【作者名】

ドーナツ教開祖 安藤ナツ

【あらすじ】

どうして雨が降るの？

どうして人は死ぬの？

どうして宇宙は広がっているの？

下校途中の青春劇。

(前書き)

結局、大切なものは絆です。

季節外れの夕立だったのだろうか？ 突然の土砂降りに、大木樹はそんなことを考えながら、自転車のペダルを回転させていた。この肌寒くなってきた季節に、びしょ濡れで自転車を運転する樹の姿はかなり惨めな物に見えるが、彼が乗る自転車の荷台には、同じ年頃と思われる少女が横向きに座っていて、青春っぽい印象が強い。

惨めなはずの姿には、同情よりも羨ましさの方が勝る。

「あー。本当、この世の中って神様も何もいたモノじゃあないわよねー」

樹の腰に手を回し、密着することで大きな雨よけを手に入れた天内遥は図々しくもそんなことを呟いた。何が図々しいかと言えば、樹と遥は初対面と言っても問題のない間柄なのだ。この遥と言う少女は、叩きつけるような雨が降ってきて間もない頃、何故か一人立ち尽くして天を見上げていた。「変な人だなー」と思いなが、その横を樹が通り抜けようとすると、「後輩。雨が降って来たから、家まで乗せてけ」笑ってそんなことを言ってみせたのだ。元来のお人良しである樹は、それを一も二もなく許可すると、話したこともない先輩を家まで送るために雨の中遠回りをしていた。

「てかさ？ 神様って本当に中途半端な仕事するわよね」

「中途半端ですか？」

普段よりも重いペダルを踏みながら、樹は遥の言葉に相槌を打つ。

「そーそ。まずこの雨ね」

片方の腕を樹の腰から離して、人差し指を立てて雷でも落ちてきそうな天を指す遥。そのイレギュラーな動きに自転車が揺れる。樹は少しだけ腰を浮かしてバランスを取ったが、「急に動くな！」と有難い言葉をいただいた。

「雨ってさ、別に必要ないよね」

「いや、重要な物だと思いますけど」

先輩の意見に反対するなどもっての他なのだが、明らかにツツコミ待ちな発言に、樹は控えめにツツコミを入れた。すると、後頭部に有難い張り手を頂戴した。「反論禁止!」

理不尽な暴力にも、樹は起こらずに笑って流す。

「じゃあ、どう必要ないんですか?」

「全体的に」

殴られ損だ。樹は今すぐに自転車を止めたくなった。が、自分よりも一回り小さな先輩をこんな雨の中置いて行くこともできなかった。山中の県道を、樹は無言でペダルを踏み台詞の続きを待った。

「だってさ、雨なんてこうやって突然降るじゃん? それがまるっきり理不尽。考えてみてよ、全く後のイベントに関係ない雨が降るゲームを貴方は面白いと思う? 『っち、一々雨のグラが入って画面重くなんだよ、あー、マジウザイ』とか後輩は言うでしょ?」

「何で僕がそんな乱暴な口調なんですか……って痛いですって!」

「反論禁止!」

三回有難い張り手を背中に喰らって、樹は「あんたの方がよっぽど理不尽だよ」と心の底で思った。思ったただけだった。

「それで、他にも雨って問題になってるじゃん」

「干ばつですか?」

「そうそう。他にも酸性雨とか。ナイル川なんて、氾濫しまくったり、水って言う存在から面倒だわ」

どうやら彼女にとっては、水すらも中途半端なものらしい。

「大体さ、水がないと生きていけないって、アホかって」

「滅茶苦茶ですよ。水がなくても生きられるなら、それは生き物じゃあないですよ」

「じゃあ、後輩は可愛い遙ちゃんが『後輩がいないと生きていけない!』って愛を叫んだらどう思う?」

「誰ですか、可愛い遙ちゃんって……」

本当に、自分は何でこんな意味不明な人のヒッチハイクを許容してしまったのか、それこそ神も何もあったもんじゃあない。まあ、

自分のお人好しは実益を伴わない仕事のようなものだと言句を押さえて、意味の分からない質問に答える樹の後頭部に、再び手刀が落ちた。

「私が可愛くないって言うの！」

「ああ、先輩が遙ちゃんなんですネ」

「ちゃん言うな！」手刀と同時にそんな言葉が右耳を襲う。

「取れる！ 耳が取れますって、遙先輩！」

「と、話を戻すと、『〜がないと生きていけない』なんて馬鹿みたいでしょ？」

強引に話を戻した遙が得意げに鼻を鳴らす。

「私が作るんだったら、そんな風にはつぐらない。水がないと生きて行くことが出来ないだなんて、中途半端。もっと何処でも手に入るものにしなさいよ」

水もそれなりに手に入るものだと思うのだが、言われてみれば水がなくて困っている地域も多いだろうし、樹は黙っておくことにした。草食系男子だかなんだか知らないが、沈黙は金だ。そして時は金なりとも言う、つまり、黙ると言うことは時間を有効に利用できると言うことだ。そう思い込むことにした。

「空気だけで動けばいいのよ。酸素だけで。その点では初期の生物って凄くない？ 硫化水素の中で生まれたんだっけ？ 毒じゃん！ 毒の中で誕生するなんて凄くない？ あるものを最大限に利用して生きる、こう言うのが中途半端じゃないんだよ、先輩」

一体どういう意図なのか、背中から腹に回る腕に力を込めて身体をより一層樹に預け始める遙。普段ならドギマギしてしまう状況だったが、厚手の冬服に交換したばかりの制服と雨水の冷たさで、女性的な感じが一切しない。まあ、自転車に乗る前に見た遙の身体はお世辞にも……。

「いや、初期の生物は全員海中じゃないですか」

先輩の成長に抱いた失礼な感想は胸の中にしまい込んで、取りあえずツツコミを入れておく。中途半端なのは遙の意見だと、指をさ

して言ってやりたい気分だ。

「まあね。つーか、冷静になればそもそもこの地球自体が中途半端。不完全」

「母なる大地を讃えてくださいよ」

「母なる？ 祖母なる大地よ、こんなもの」

もしかして将来、人類が宇宙進出したら、地球のことをこう言うのかもしれない。樹はそんなことを考えながらペダルを回す。

「引力、斥力、重力、電力、火力、摩擦力、空気抵抗、えとせとらー。この星が出来たの何年前か知ってる？ 四十六年前よ？ いくつか？」

「いや、四十六億年前ですよ」

「パソコンのOSだって、もっとテンポよく更新するっての。誰も覚えていない昔からずーっと同じシステムを使いまわしてるなんて、怠慢よ」

パソコンだって、根本的な設計は変わっていないと思うのだが、樹は溜め息を吐く。

「そして、そんな古いシステムがないと生きて行くことのできない生物。愚かね」

「そうですね」お昼番組を真似ると、チョップが後頭部に当たった。手加減を知っているのか知らないのか、毎回地味に痛い攻撃であった。

「大体、一日生きるのに、どれだけの犠牲が必要なの？ 後輩が生きるために、何匹かの動物は殺され商品になって、後輩の住む場所の為に虫とか動物は住処を負われ、後輩のために幾つもの木々が切り倒される。どれだけ無駄なのよ。もっと、完成された作品を作りなさいよ！ 神！」

どうして、わざわざ自分を引き合いに出すんだ。樹は心の中で思いつきり叫びながら、「小動物なんて、自分と同じくらいの重量を毎日食べますから」と言っておいた。何も、人間（と言うより、樹）だけが消費をしているわけではないのだ。

遙もそれは承知のようで、「だから、そう言った生きるシステムが中途半端だって言ってるの」またまた無茶苦茶を言い始めた。

「っていうかさ、何でわざわざ生きたり死んだりする必要性があるわけ？」

「はい？」

生と死の必要性？ そんな言葉は初めて聞いたと、樹はばれないように嫌そうな顔をする。

「だってさ、宇宙なんてどんどん広がってるわけだよ？ だったら他の動物だってどんどん広がってもおかしくないじゃん」

「おかしいですよ。ぼく達は所詮、有機化合物の集合体なんですから。宇宙みたいに広がるわけにはいかないですよ」

有機化合物と広がり続けることが出来ないにどんな因果関係があるか、自分で言っても謎に思う樹。しかし、後ろに座る遙は別にそんなことは気にしない確信があった。

彼女は暇だから適当に自分の言いたいことを言っているだけなのだ。樹の言葉にそれほど興味はないだろう。さっきから、質問とは微妙にずれた回答ばかり続けているのがその証拠だ。

「宇宙ってさ、元々は一つだったわけじゃん。それが爆発して、私たちが産まれた」

ビックバン説。

今現在もつとも有名な宇宙創造の話まで出して来る遙。恐らく、彼女はその詳細を知らないだろうが、話を続行するのに問題はないと思われるの。

「あれってさ、滅茶苦茶な爆発で、無茶苦茶に小さい物が爆発的に広がったんでしょ？」

「さあ。ぼく文系ですから」

もつとも、遙の言いたいことを15文字で表せと言われたら、困る以外できなくなってしまう程度の文系だが。いや、そもそも他人の心の内を考えるのは文系の範疇ではないか。

「ってことはさ、私たちも。後輩も私も、同じ爆発から産まれたわ

けじゃん？」

「さあ。ぼく文系ですから」

校内で遥にあったらしく絡まれそうだな。そう思うだけで憂鬱になる。絶対にこの人は自分を『友達』だと既に思い込んでいそうだ。いや、便利な後輩か？

「人間も、宇宙も祖母なる大地も同じに生まれたんだから、それはもう同一よ。宇宙が持つてる可能性を私たちが持っていてもおかしくはない」

「もう、よく意味が分からないんですけど？」

「つまり、宇宙の元はすべてに成り得るわけよ。究極生命体みたいだね」

「……それがどう、生きると死ぬに関係あるんですか？」

かろうじて究極生命体の意味だけは納得しながら、樹はようやく山の頂上までたどり着いた。勿論、絶景が見えるわけでもなければ、晴れ間が見えるわけでもない。山を登ったと言う事実確認だけだ。山頂には自販機があったが、どれも冷たい飲み物ばかりで、役に立ちそうにもない。

「いいかい？　つまり……」

「先輩。お話も良いですけど、坂下るんで、暴れないで下さいよ」
背中を軽く揺すって、遥の位置を微調整して樹は自転車を前に勧める。結構急な坂に、鋭いカーブ。おまけに今日の悪天候。上り以上を気を付けなくてはいけないだろう。

「御淑やかなお嬢様である私がいつ暴れましたか？」

「いや、見知らぬ男のチャリの後ろに乗る自転でお嬢様路線は捨ててください」

「見知らぬことはないよ、君、後輩だし」

「名前も知らないに訂正しておきますよ」

本当に面倒な人を乗せてしまった。後悔ばかりが樹の頭にへばりつく。が、このまま遥を放り出したらもっと後悔することになる。本当に面倒なのは自分の正確か……本当に嫌になる。

「でさ、話は戻るけども、宇宙の元には全ての可能性が含まれてるわけ。わかる？」

わからねーよ。

「なんて言うのかな？ 宇宙の元から私たちの全てが出来てるわけじゃん。じゃあさ、宇宙の元には、私も後輩も林檎も過去も未来も終始もごっちゃ混ぜになってないとおかしいじゃん。つまり、始りと終わりが同時に存在してるわけ」

わからねーよ。パートツー。

「すいません、五文字以内で言って貰えませんか」

「わかれ馬鹿」

ぴったし五文字でここまで腹が立つ回答がされるなんて……。本当に、ついていない。樹は自爆覚悟で自転車の前輪を滑らそうかと真剣に考えてしまった。

「つーか、今のなし。自分でも何が言いたいかわからなくなってきた」

「パーだよ！ 今までのやり取りと先輩の頭が！」

思わず、本音が口から滑る。口調も友人に使う様な雑な物に自然となってしまった。本当に、この先輩は馬鹿だ。

「天罰！」 遥の掛け声と共に、げんこつが樹の後頭部を襲った。目から火が出たと錯覚するような素晴らしい天罰だった。

「痛い！ 何この人？ 王様？」

「平伏せ！ なははは！」

不遜に笑う遥。雨で髪形も薄い化粧も凄まじいことになっているのに、なんだか威厳のようなものが見えた。気がする。

そして、その図々しさが、樹の中の重要な何かを越えた。

「決めた！ もうあんたには敬語なんて使わねー！ 降りろ！ 俺の善意を返せ！」

「でも、やっぱり生きるとか死ぬなんて概念を考えた神様はクズだよ」

「本当に俺の話聞けよ！ もうこの話し合いが無駄だよ！」

出したことのないような大声を出して、樹が自己主張をする。こんな自己主張をしたのは、銀髪先輩に誤ってショートケーキをぶつけてしまった時の土下座以来だ。なんであの時自分は、ショートケーキを食べながら自転車に乗ってこけてしまったんだろうか？「だってさ、人間が生きてなかったら、この世の問題は全部片付くじゃん。人間が死ななかったら、世間の疑問は大抵ほっといてもいいじゃん。そうだよ、そうそう。そう言うことが言いたかったの。不完全で中途半端な世界を代表する概念だよ、水とか地球とか宇宙とかよりも、そう、生き死にこそが無駄なんだよ。明らかに神様の怠慢だよ！」

「生き死にのない世界ってなんだよ！」

虚無だよ、虚無。樹が吼える。

虚ろな無。有るのか無いのかわからない、曖昧模糊としすぎていて、生も死もない世界の方がよっぽど中途半端だ。

もちろん、そんな言葉に遥は耳を貸さない。

「極々当たり前に、人間は死ぬとか言うけど、私たちは生きていると言うけど、それは一体何でなの？ どうして私たちは、生きたり死んだりするの？ DNAの乗り物とまで言われて、只々繋いでいくだけの存在なのに、わざわざ何万年も考えてまで生きる理由を探して、何がしたいの？ 神様は一体なしてどうして、生き死になんて作ったの？」

誰もが『生』きて『死』んでいく。

「生きてても死んでもなかったら、私たちは完全だったのに。そうすれば今も昔も存在しないし、食う寝る必要もない。誰かを好きになったり憎んだり、働いたりサボったり。そんな茶番必要ないじゃない？ あーそうだよ！ そうそう！ いい感じ、今私凄い頭回ってない？」

自分の物ではないように動く口に、遥は驚き半分嬉しさ半分に笑う。

「先輩、テンション高い所申し訳ないですけど。誰も死んでも生き

でもないですよ。本当にこの世界は茶番なんですから、無理しないでいいですよ」

そんな遥かに、困ったように樹は額に張り付いた前髪を右手で弄った。

「え？」

樹の発言に、遥の声が凍る。

「ようやくわかりましたよ。先輩の理不尽な暴力も、どうして執拗に身体を俺に預けるかも、その意味不明な言動とテンションも、神様がいないだとか、理不尽だとか無茶苦茶だとか、そんなことを話したのか？」

「先輩？ 何言ってるの？」

「何から言って欲しいんですか？」

坂を下る自転車の車輪は既に限界速度で回転し、二人を一秒でも早く先に勧めようと、唸りを上げていた。

「まあ、本命から行きましょうか」何のことはなさそうに、樹はぼつりと、明日の天気を占ういい加減さで呟いた。「先輩、フラれたでしょ」

「っ！」

「出会った時、先輩上を見てたでしょ？ おかしいなって思ったんですよ。雨が降ってるのなら、下向くじゃあないですか、普通。あれ、泣いていたんですね」

「泣いてなんか……」

「後、俺の背中にくっついてくるのも、涙を拭うためですよ。誰だって、泣き顔なんて見られたくない。それに顔だけくっつけたら変ですもんね。最初に無理やり雨の話題に振ったのも、瞳が濡れているのを突っ込まれたら、雨のせいになろうと思っていたんですよ？ 良かったー、勘違いしなくて」

立場が逆転したかのように、樹の口が滑らかに動く。彼が感じている爽快感は雨のせいでも坂のおかげでもないのだろう。

「それで、情緒も不安定。誰かと喋って気を紛らわしたい。でもあ

まり人と喋りたい気分でもない。弱音を吐いてしまいそうで、弱い自分が出てきそうで、フラれた程度でこんなに自分が傷つくだなんて」

「な、何で？ 何でそんなにべらべらと、私のことの、何がわかるのよ！」

「今までで一番、台詞の意味が分かりませんよ。まあ、先輩のさっきの発言ですよ。『誰かを好きになったり憎んだり』ここだけ明らかに、他とは毛色が違いますからね。それでピーンと来たわけです」
ハンドルから手を離して腕を組んで、一人頷く樹。

「俺は、お人好しを自称しています。誰かの為に自分を犠牲にするのが大好きなマゾなんです。弱っている人間を見たら、自分の不利益になろうとも、文句を言おうとも、その人間のために何かをしてあげたくなんです。誰かに俺は尽くしたいんです。そうやって、誰かの弱り切った姿勢に取り入っている内に、人がどう弱っているかわかるようになったんですよ」

上機嫌に、樹は唇を舐めながらハンドルを握りしめ、大袈裟に自転車を傾けてカーブを突き抜ける。

「でね、先輩。気が付くんですよ。人間って、大した悩みは持っていない、ってね」

悪魔のように、樹は断言する。お人好しを名乗る彼は、困った人間を多く見てきた。学生の悩みから、近所のおばさんの相談。大したことのない相談ばかりだったと、樹自身思うが、世間なんて大袈裟な物は、結局は大したことのないモノの集合体でしかないと言う証明だ。

そして、人間に取って最も重要な問題は生でも死でも、働くことでも怠けることでも、愛することでも憎むことでもない。

「人間の悩みなんて、結局のところ人間関係に過ぎないんですよ」
神のように、樹が断言する。

たった四文字が、人間と言う生物の最大の悩みであると。

「もし人間関係が潤滑に回っている人間がいるとしたら、先輩のよ

うに下らない妄言で自分を納得させようとなんてしませんよ。そう言った人は何も考える必要がないんですよ。友人や家族さえ満足にいれば、なんとなく生きていくだけで楽しいんですよ。これを悪く言うのは僻みですよ。上手く行っていない自分を正当化させようと、大抵悩んでいる人間はこうします。先輩の場合は神様に八つ当たりしましたね。もしかして初恋か何かでしたか？ それはさて置き、それだけのことなんですよ。生きている死んでいるって言うのも、自分の中の人間関係のランク付けの際に使う項目みたいなもんです。『死んでいるから話せない』利用できる価値が薄い』そんな程度ですよ、突き詰めれば、美しい思い出だって、誰かとの思い出を比べる物差しとして重要なだけでしょう？ 水が必要かどうかなんて、どうでも良いんですよ。宇宙が広がっているとか、ビックバンだとか、そんなことは人間関係の前では無意味ですよ。いつの時代だって、楽しく生きていくのは、無知だけど暖かい家庭のある人間、笑いあえる友人のいる人々なんですよ。苦楽を共にするって言うのは、本当に素晴らしい言葉ですよ。だから俺は、誰かの役に立ちたいんですよ。自分がいるかどうかなんて、神様がいるかどうかよりもどうでも良いんです。問題なのは自分を認識してくれる、必要としてくれる、笑いあうことのできる人間がいるかどうかなんですよ」遙が喋らないのを良いことに、樹は本当に楽しそうに、傍から見ると狂人と見紛うごときに嗤った。

「だから、先輩の悩みは痛い程わかりますよ。我が身を引き裂く思いです。宇宙とか中途半端だとか聞いたときは、意味不明な悩みに少しイラついてしまいましたけど、悩みがわかれば俺に任せてくださいよ。死んだ生きたとか、神とか宇宙とか考える暇なんて与えさせませんよ」

パズルみたいなものですから。

樹は最後にそう言った。

人間を好きにさせるのに必要なのは、『興味』だけだ。趣味だとか、子のみだとかそう言ってもものはきっかけで、お互いの欠けてい

る部分をかみ合わせればいいだけなのだと、樹は実感としてわかっていて。

好きだとか嫌いだとかは、そう大した問題ではない。樹に取って、その状態まで興味を持って入れればそれはもう等価だ。好きにも嫌いにも、どちらにも転がすことは簡単だ。

「あんた、何を言っているの？」

ようやく絞り出した遙の質問に、樹は即答する。本当に力になりたいだけなのだ。

「別に、私は泣いてなんかないし、フラれてなんか……」

「だから、良いんですよ。無理しなくて。先輩の求めるニンゲンカンはケイはわかりましたから、後は俺がちょちよいと埋めて差し上げますよ」

「そんなの、無理に決まってる！ 人の気持ちを何だと思ってるの？」

「だから、人間関係ですよ」

樹は質問の意味が分からにと言う風に、首を傾げる。

「人間関係を、わかりやすくするために気持ちってあるんですよ。人間関係をわかりやすくするために感情ってあるんですよ。人間関係をわかりやすくするために文化ってあるんですよ。人間関係をわかりやすくするために宗教があるんですよ。人間関係をわかりやすくするために善悪があるんですよ。人間関係をわかりやすくするために言葉はあるんですよ」

「そんなの！」と強く反論しようとして、遙の口は黙ってしまふ。そんなような気がしてきたのだ。確かに遙は先輩に告白してフラれた帰りだった、涙を誤魔化すために雨を眺めていた。樹の学生服に鼻水と涙を大量に付けたし、自分の中に沈んだ気持ちを引っ張り上げようとテンションを無理やりトップにいれていた。

すべて、樹の言うとおりであった。

だったら、樹の言う言葉はすべて本物じゃあないだろうか？

年下と言うだけで見てくびっていたが、そんなこととは全然関係なくて、樹は正しいんじゃないだろうか？

そんな風に思い込み始めていた。

多分、樹に『福本先輩と付き合いたい』と言えば、本当にそうなるだろうと確信さえ覚えていた。

「おろして！」

しかし、遙は強くそれをはねのけた。声が震える程、恐ろしい決断だった。

「なんで？ 送ってきますよ。つーか、先輩の幸せのためにももう少しお話したいんですけど」

「良いからおろして！」

樹の胴を抱いていた手を離して、ハンドルへと遙は手を伸ばす。

無理矢理でもブレーキを奪い取ろうする遙かに、樹は「わかりました」と自転車を止める。

「ここからは、歩いて帰る」

自転車の荷台から降りると、遙はそれだけを言ってそのまま坂道を走って下り始めた。遠回りしてこの道を選んだ樹としては、進にも戻るにも中途半端な山の中腹に残された形となってしまった。

「先輩抜くと、気まずいだろうし、もう一回上るか」

溜め息を吐いて、樹は山頂へむけて自転車を切り返す。

「先輩にはフラれちゃったな」

冗談のようにそう呟いて、樹は自転車のペダルを立ち漕ぎで回し、坂道を上りはじめる。

「確か、斉藤の奴がああ先輩を好きだったはずだから、幸せになる人間が二人も一気に増える所だったのに、勿体ない事をした」

足し算するように、今自分が抱えている人間関係を整理して、樹は微笑む。

「お人好しはこれだから辞められない」

（後書き）

絆の大切さを実感したら、感想をぜひください。

リクエスト小説なんかもやっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340o/>

ユウダチバイシクル

2010年10月15日23時25分発行